

伏見康治著作集

報 月
(7)

第5巻
1987・12

画家的物理学者……………安野光雅…1

物理学者になりそこなうの記……………関 寛治…4

フエロー・トラベラーのこと……………服部 学…7

みすず書房
東京都文京区
本郷 3-17-15

画家的物理学者

安野光雅

むかし伏見康治と対談の機会を得たとき、寺田寅彦を寅彦と呼びすてにした故事にならない、我がすばらしい先人を「伏見康治」と、敢えて敬称略でかくことにしよう。かれは知る人ぞ知る絵の上手である。その一点をのぞいて、わたしは対談などと、そんな対等な姿勢を持つことなどできないのだが、たまたま私が絵をなりわいとしていることが、絵から物理学者へと道を迷った、伏見康治と知遇を得ることになったのだった。

わたしは会議のときなど手持ち無沙汰のおり、紙の上に鉛筆を遊ばせ、もつれた糸屑のような模様を書くことがある。そしてそれをほんとの糸屑にみたて、線が交差するたびに、上をわたったら、こんどは下をくぐるといふ具合に編むように描いて遊ぶことがある。

すると不思議に過不足なく編むことができる、つまりまちがえさえしなければ、どんなにもつれた糸でもいちどに二本くぐるようなことをしないで完結する。

これはわたしのてすさびだつたのだが、伏見康治も同じことをやるのだそうである。そして、それが過不足なく完結することを、証明したというのである。

ここが、絵描きと物理学者の越えがたいいがいだなと思つた。だいいち糸のもつれと、証明ということをもすびつけて考えるという、着想がわたしなど素人にはない。

・折紙で多面体をつくったり、(この本にかぎらず、伏見夫人の隠然たる協力、あるいは本人も認めているよう

に、むしろ夫人の主導権のようなものがあることを、黙っていたなかつたとしても、その本の価値はさがらないだろうが)

・あのだべる卵に物理の深奥を説いてみせたり(福音館書店から本になってでている)

・あるいは、本来われわれの専門といつていい、模様の数理を解き、それを結晶構造の秘密に結び付けるなど(これはむかし数学セミナーに連載されたまま、読者の要望が多いにもかかわらず、本人の怠慢によってまだ本になっていない、今回の全集にはいるかどうか、問題である)

・むかしこんなこともあった。エッシャーの無限階段と、わたしの絵本『ふしぎなえ』のなかの無限階段が、構造的数理的にちがうことを証明してくださったこともあった。一方、ここらない匿名の読者から、あれは「エッシャーの階段の模倣である」という手紙をもらつていたことを伏見康治はしらなかつたはずである。

その匿名の投書が頭にきて、わたしは、エッシャーを尊敬するし勉強させてもらったが、あのような仕事は専門ではないんだから、もう、あんな絵本なんて書かないぞと思つていた矢先である。それを思うと、感謝の言葉がない。

ところでここに書いたようなことは、みんな伏見康治の

本業ではなく、てすさびである。しかしほかの学者とちがつて、そんな日常的なことのなかから数理をみつけようとする姿は、寅彦の場合とおなじで、わたしなどは、そのことに心底脱帽するのである。

にもかかわらずだ、「数学セミナー」(日本評論社刊)にわたしが連載していた算私語録というページに、つぎのようなことを書いてしまった。これは伏見康治にたいする、甘えの形をとつた、感謝の意志表示なのだが、そういつても引用してもらえないだろうが。

引用する前に断わります。暴言多謝……。

天災は忘れた頃にくる、という至言があるが、昭和五十五年十一月十九日、新宿安田火災海上本店ビル・大会議室において、伏見康治が講演することになっていた。ところが突如ウィーンにいく用事ができたために、やむなく私に代理をたのむという電話があった。

「ようござんす。私の電話番号をその係の人に伝えてください。あとは一切何も心配せずに行つてらっしゃい。私がかえって私は卒倒せんばかりに驚いた。送られてきた印刷物の講演予定の題目は「科学と芸術」とあり、聴衆は日本建築設計監理協会連合会の面々で、まさしく科学と芸術の

間の人々であった。

「天災云々……」は、伏見康治もまた心服する寺田寅彦の至言だとされている。興味が起こってしらべたら、「天災と国防」という小品の中にその出所らしき個所が見出された。

「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を充分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならないはずであるのに、それがいっこうにできていないのはどういうわけであるか。そのおもなる原因は、畢竟（ひきついで）そういう天災がきわめてまれにしか起こらないで、ちやうど人間が前車の顛覆（てんぷく）を忘れたころにそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。」

十一月十九日のための講演草稿

えー、本日ここに立って立派な講演をしているのは、日本学術会議の会長であるはずでございますが、人間長く生きておりますとエと何が起こるか見当も立たないもので、一介の絵かきが名代をつとめさせていただくことになりました。事情は、先刻ご承知の通りでございます。

えー、このような大そうなことを引き受けましたのは、多少子細がございまして、二年前私めも突如外国に行かねばならぬことがありました折、人に講演を代ってもらった

ことがございます。因果はめぐるると申しますか、こんどは私の番になりましたので、この際何かの役に立とうと、決心いたしました。非常の場合に人に代ってもらえるてエコとは本当にありがたいもので、私はフランスではワインを、イギリスでは洋服生地を、アンカレジでは代理人の奥さんの宝石まで買って帰って、代理の友人に御礼の意を表わしたものでございますが、まあこのことにつきましては、どなた様も伏見先生にはないしよにして置いていただきたいもので、私が礼を催促しているように聞こえたりすると心外でございますから……。

十一月十七日の夕刻四時五十分、伏見康治から電話があったという報せを聞き、私は大急ぎで学術会議に電話をした。いま頃はウィーンにいるはずの人がそこにいて、平身低頭して謝りたいという。謝るなんて、とんでもない。手術しなくてよくなった患者の心境である。……そして、この一件は「算私語録」の好餌となった。

十一月十九日、私は聴衆の中にいて伏見康治の講演をきいた。M・C・エッシャーのくりかえし模様の中にひそむ数理の美しさから説きおこし、科学と芸術の断ちがたい創造世界に言及した名講演であった。

（西家・エッセイスト）